ムスリムとクリスチャン
――私の体験から――

綱島（三宅） 郁子

カトリック大阪大司教区出版の小冊子『声』2002年12月号（1475号）には、南日本新聞の2002年2月25日紙上フォーラム『宗教とテロ』が紹介されている（p.24-27）。筆者は鹿児島教区司祭の小平卓保（こひら たくほ）氏であり、フォーラムには、小平神父と共に、マレーシアの留学生（鹿児島大学院生）・真宗大谷派住職・哲学者の 4 人が参加したという。その中で、小平神父は「キリスト教徒の日本人は、神概念など信仰を共有する面もあるから、非キリスト教徒の日本人よりもイスラム教の理解が容易であり、今回も彼らへの誤解の解消に努めるべきだろう。」と指摘されたとのことである（p.26）。過去 12 年以上に及ぶマレーシア経験の中で常々私が感じていたことを、小平神父が見事に代弁してくださった、と非常にうれしく思った。

マレーシアにいた頃、他愛もない世間話の途中で、別に宗教関係の話をしていたわけでもないのに、唐突にムスリムの方から、「もしかして、あなたにはキリスト教のバックグランドがありませんか」などと聞かれたことがしばしばある。「どうしてそんなことがわかるんですか」と尋ねると、「あなたの言動を見ていてそんな気がしたから」という返事がかえってくるのがほとんどだった。これは、ムスリムが、人の判断基準を何に置いているかを示す一つの事例であるように思われる。

計4年間のマレーシア滞在中、ムスリム（パキスタン系・インド系・マレー系・日系など）のほぼ9割強以上が、個人的に私に対して親近感を持ってくださり、過大なまでに丁重に扱ってくださったのは、まさに「神概念など信仰を共有する面もあるから」という理由からであった。つまり、兄弟姉妹宗教の仲間だというのである。ある時、一人の日本人ムスリムは言った。「この話を他の日本人にすると皆笑うんだけど、三宅さん（注：私の旧姓）なら絶対に笑わないよね。むしろ、わかってくれるよね」。

井筒俊彦氏が岩波文庫『コーラン（上）』の解説で書かれているように、イスラームの理解にはクルアーンの理解が必要だが、そのクルアーン理解には、聖書の知識が必要だ、というのは、宗教学の素人である私にも、全くうなずけるところである。一方、非ムスリムの識者が書いた日本語文献の中には、啓蒙意識からか、あるいは一種の判官びいきからなのか、「西洋人のイスラーム観には、敵意や偏見があるが、日本人はその点、西洋とイスラームの橋渡しができる」などと述べているものがある。ずいぶん勇ましい意見だとびっくりさせられる。私個人は、（イスラーム特有の考え方というよりも、セム系の発想なのに、なんでイスラームでは、イスラームでは、と殊更に言い立てるのだろう、「イスラームの習慣」の幾つかはキリスト教にだってあるのに）とずっと不思議に思っていた。

なぜこんなことが一介の主婦ごときに言えるのか、

というと、それは以前の会報にも書かせていただいたように、私自身、カトリックの幼児教育を受けたためである。4、5 歳の子どもに何が理解できるのか、と思われるかもしれないが、1990 年代初頭にマレーシアでアラブ系の服装やアラブ由来の音楽に触れたとき、(あ、幼稚園の聖劇と似てる！)と直感したのである。それもそのはず、古代パレスチナ／イスラエルの文化様式は、アラブと連関があるからで、私が通っていたカトリック幼稚園のクリスマスの聖劇で使った衣装は、頭から長い布をかぶり、その上に輪っかをのせた服装だったし、背景で踊っていた女たち(といっても実は幼稚園児)の格好と音楽も、ユダヤ風ではあったが、いかにも中東らしさがうかがえるものであった。小学校から修士課程までは、国公立の学校ばかりだったので、一層、当時の原体験が鮮明に私の記憶に残っているのである。

マレーシアのキリスト教を研究している人だと間違えられることが多いが、自分ではキリスト教を研究しているつもりは全くない。口頭発表で話している内容のうち、キリスト教に関するものは、ごく基本的な一般知識に過ぎない。ただ、キリスト教というドメイン(領域)での言語使用の諸問題というテーマを考察するにあたって、キリスト教の基礎情報がなければお話にならないから、必要に応じて引用しているだけである。そもそも、キリスト教学において、言語問題は主流ではないとされている。

先にも述べたように、イスラームやムスリムの理解には、セム系啓示宗教の系譜を心得ることが前提条件であると思う。マレー(シア)語には、その系譜を跡付けするような語彙が幾つかある。たとえば'Nasrani, Serani, Almasih'などは、「ナザレ人のイエス」「救い主」を示唆する語彙であり、新約聖書のいくつかの箇所がふっと想起される。そこから、ムスリムのキリスト教に対する尊重の気持ちと同時に、じれったさをも感じ取ることができる。相反するそのような葛藤心理を把握しない限り、非ムスリムによるイスラームおよびムスリム理解は生半可だろうと私は思う。

(2002 年クリスマスの日に寄せて)